

## 関西支部発足 50 周年を迎えて

第 25 期支部長 永石 竜起

関西支部が旧低温工学協会の最初の支部として発足し、1974 年に第 1 回の総会が行われてから半世紀が経ちました。この記念すべき年を迎えるに当たりまして、立上げや支部基盤確立に奮闘された数多くの先達、日頃より支部活動にご支援をいただいております事業会員、関西支部会員の皆様に心から感謝申し上げます。

関西支部が 50 年にわたる歴史を紡いでこられたのは、大阪を中心としますと関西には 1 時間程度の移動圏内に低温、超電導関連の多くの大学、公的研究機関があり、またいち早く低温、超電導を研究開発し事業化を目指した企業が数多く存在したこと、さらには多士済々な人材が団体、専門分野、立場の違いなどを超越して渾然一体となることを期待するという支部発足の精神を多くの支部会員が引き継いでこられたことにあると思っています。1980 年代位までは、企業での商品化に至る低温や超電導技術の開発が大学や公的研究機関のサポートによってなされてきたことが産学官の結びつきをより強くしていったと考えられます。その結果、金属系超電導線材、MRI、NMR、加速器などに必要な超電導マグネット、液化機、低温貯蔵タンク、LNG 運搬船などが関西から生まれました。しかしながら、その後、研究開発、技術開発が進み、応用展開、事業が成熟期を迎えることで、徐々に実質的な産学の結びつきが減ってきているというのが現状であると感じております。

このような中、関西支部の長い歴史を将来にわたってつないでいくためには、今一度その存在意義を明確にして行く必要があるのではと考えています。主には関西支部の特徴である産学官のつながりを生かしながら若い方々が活躍し、恩恵を受けられる活動です。関西支部立上げ発起メンバーであり第 1 期支部長の信貴豊一郎先生が発足 10 周年の挨拶で支部事業について以下のように書いておられます。「恒例事業以外に特筆したいことは、若い人々の活動の場としてある期間にわたる研究会を自由に設定できるようにし活動資金をつけたことであります。」その一つとして、ドイツでの低温工学講習会のテキストを勉強する海外低温工学研究会を 8 年間続けられ、大変なご苦労があったそうですが、その成果を「低温工学ハンドブック」

として出版されました。低温技術者には大変役に立つ資料になったばかりか、後に低温工学協会の「超伝導・低温工学ハンドブック」に引き継がれ、業界の発展に大いに寄与をしたことは言うまでもありません。当時の若い支部会員が熱い思いを持って取り組まれた結果だと思います。現在、関西支部で若手に特化した事業は若手合同講演会です。分野は広いですが、学生諸氏の間で活発な議論が行われ、開催側としてもとても勇気付けられます。若い方々のアイデアによる若手主体の開催や他支部の学生研究交流会への参加も活性化に結び付くのではと期待しています。一方、年 3 回開催しております支部講演会ですが、これまで学生の方の参加がありませんでした。参加を促すべく昨年試行的に学生の参加費無料化を実施しましたところ、全体の 2 割の参加があり、アンケートでは大変好評であることが分かりました。コロナ禍で広がったオンライン化で聴講の敷居が低くなったこともあり、無料化による学生の皆様への積極的な情報展開、交流を進めて行きたいと思います。

さて、低温、超電導技術は一般的には社会の縁の下の力持ち的存在で、社会生活上表立って役に立ち、ありがたいと思わせるようなものではありません。しかしながら、インフラを始め、産業、医療、科学分野にとっては欠かせない技術です。また、建設が進むリニア中央新幹線、最近話題の小型核融合炉など人類の夢の実現において大きな柱の技術です。そして、注目される水素技術に関しても関西では全国に先駆けてガスステーションが設置され、世界初の液体水素運搬船も開発され就航しました。このように低温、超電導技術の宝庫である関西で関西支部はその存在価値を堅固にして行かねばと考えております。講演会他の DX による全国への情報発信、さらには議論を通じて渾然一体となるという関西支部発足の精神を関西支部恒例の懇親の場も併せて、若い方とともにつなげて行くことが重要な責務と感じております。

最後になりますが、長年事務局をお引き受けいただきありがとうございます岩見真代様に厚くお礼申し上げます。事業会員の皆様には改めて日頃のご支援に感謝申し上げますとともに、引き続きご支援とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

